巻頭言

教育の陰にある教育

中沢　和子

ゴミとゴミ捨て袋

毎年、行楽シーズンになると、行楽地に捨てられるゴミや空き缶が世間の話題になる。海開きにさきがけて、小学生達が集団で砂浜のゴミ拾いをしたり、行楽地の清掃に出たりすると、よくテレビのニュースなどで取り上げられ、子どもが差し出されたマイクに向かって、

「ゴミがたくさん捨ててあるのでびっくりしました。大人もゴミは捨てないようにして貰いたいと思います」

などと言う姿が放映されたりする。実際、行楽地でなくても、道路沿いの植え込みやちょっとした物陰などに、空き缶やスナック菓子の食べ殻が捨てられているのはよく見受けるものである。長距離電車の終点で乗客が降りたあとの座席にも、弁当などの食べ殻が残っていることが多い。

ここで私たちが思い出しておきたいのは、保育園・幼稚園、小・中学校で、遠足の時は必ずゴミ捨て袋を持たせ、空き缶や食べ殻はすべて家に持ち帰る教育を続けたきたことである。私が覚えている限りでも四〇年以上前から、園や学校で渡される遠足の注意書きには必ず所持品の中に「ゴミ捨て袋」があった。義務教育の学校では公立・私立を問わず必ずゴミ捨て袋を持たせているようだから、個人として一〇年以上、社会として五〇年近くこの教育が続けられていることになる。いま社会で生活している大人の殆ど全ての人は学校時代にゴミ捨て袋を持って遠足に行った経験があるはずなのである。

この教育は幼稚園・小・中学校の教育過程とは関係なく、まさに一貫教育として行われ続けてきた。地域差、学校差、予算など、「でも……だから駄目だ」という理由は一つも成り立たない。それなのにこれだけゴミが捨てられているのだから、この教育は不成功だったのではないだろうか。遠足の注意書きは誰からも忘れ去られ、不成功という意識も持たれていないように見える。それはいったいなぜなのだろうか。

ゴミ袋の背景

いま飲み終わったジュースの空き缶や食べ殻を野山に投げ捨てるかどうかは、ごく単純に、その人が持つ美しさへの感覚にかかっている。波打ち際に貝殻が散らばっているのはいいものだし、川に紅葉が流れるのは美しいが、紙屑や空き缶が散らばっているのは我慢できない、という感覚である。この感覚があれば、少なくとも自分が散らかすことはできないと思われる。

第二は想像力である。口を引き開けた空き缶の断面やプラスチックの破片が落ちていたら、次に来た誰かを傷つけないだろうか。また食べ殻ではないが、ナイロンの釣り糸が絡まって飛び立てない鳥や、片足を引きちぎられた鳥の姿が報道されることもある。仲間の鳥は飛び立って渡っていくのに、もがき続け、力つきて死ぬ鳥、足をちぎられてなお飛ぼうとする鳥の姿を想像できるなら、切れた釣り糸を捨てておくことはできないと思われる。思いやりとは、できる限り相手の立場に近づいて、その状況を思い浮かべる想像力の上に成り立つのである。

第三は、想像力の基礎となる確実な知識である。金属や裂けたプラスチック容器の鋭い断面が、思いがけないほど危険なこと、化学繊維が水の中でも変化せず、いつまでも原型を保っていること、人間以外の動物はからんだ糸をほどく器用な手を持っていないことなど、ごく当たり前な、しっかりした知識と、それをつなぐ思考力とを持っていな

ければ、充分に想像を巡らすことはできないし、従って思いやることもできないと思われる。知識も思考力も、優しい思いやりの心の基礎なのである。

○歳児からの生涯学習

糸がからまって飛べない鳥や、流れてくるビニール袋をクラゲと間違えて食べてしまうイルカの話などは、まだ想像しやすいかも知れない。しかし自然界は全て複雑に関係し合っているから、人間が自然の生態系を護ろうとする理念の基礎には、学校で学ぶ殆ど全ての知識が関わってくる。美しさへの感覚を育てるのはその出発点であり、まさに○歳児から始まるといってよい。ゴミ捨て袋の教育は生涯にわたる総合学習の集積なのである。

今までこれが不成功だったのは、この大きな背景を見失って、ただ習慣的に「ゴミを捨てるな」とだけ繰り返していたからではないだろうか。自分たちが休んだ跡が散らかっていてはみっともない、という程度のしつけだったかもしれない。

特に乳幼児の教育では、子どもが幼いだけに、私たちはこまごまとした世話や言葉かけの中に教育の内容の大きさを見逃しやすいものである。日常繰り返される、ごく単純に見える子ども達との生活の中にも、生涯にわたる学習の基礎となる大きな理念が隠されていることを、改めて感じたいと思う。